KSKQ
イマージュ
2013年2月

1991年9月　第三種郵便承認　毎月（1・2・3・4・5・6・7・8の日）発行

ご紹介、
劇団態変30年目にしてお届けするは、現代を代表するアーティストをお招きしての渾身のSF超大作。

舞台は前作『虎視眈眈』後の世界。
人類が滅亡したあとの世界です。

音楽　ウォン・ウィンツァン、美術　榎忠と共に、作品によって新しいものをただ切り開く。

目撃せよ！

目次

2　「水の輝きでやってくる新世界に向かって」金満里
3　インタビュー～音楽　ウォン・ウィンツァン～
4　インタビュー～美術　榎忠～
5・6　「演出家に聞け！五人の役者の突撃取材！」
7　新作公演『ミズスマシ』詳細
8　劇団態変へのご協力のお願い

ミズスマシ

Water strider

水の輝きでやってくる新世界に向かって

施設へ入った私は、そこで文字というものに生まれて初めて触れた。
字を初めて習う日に、やって来た国語の新（あたらし）先生が、かな、というのを今から教える、という。
あ・い・う・え・お、だ。
その最初の、あ。あ、は新しいの、あ、先生の名前の、あ、だと教えられその響きと文字を覚える期待感で
とてもワクワクした。
一つずつ先生が、大きく書き、声に出して発音し、それを子供が同じく真似するという、かな文字の勉強だ。
「あ」は先生の名前のお陰で大いに憶えられたが、くねるかな文字と発音との間に脈絡や法則は一切感じられず、
私はしまいに退屈になりだし困った。そうする頃に、「ひ」、が現れた。
とても理解の及ばない奇天烈な字に、お手上げになりかけたが、待てよ、何となく茄子の形に似てるなと発見。
すると、かな文字が自分へ近しいものと感じられだし、ま、そういうもの、としてかな文字は憶えるんだな、と捉えた。
なぜか次に記憶に鮮明に残っているのが、新先生に私は抱えられて施設内にある庭の池を覗いていたのだ。
その池は普段、歩けない子供には近寄れない、これ又意味不明な空間であったのだが、
大きな大人に抱えられ真上から見下ろすと、そこには水が眼前に広がっていて、新境地の世界があった。
が、しかしそれも視野いっぱいにただ水が広がるだけで、他にはなんにも見えないので、つまらなくなってきた。
そのとき、水面にへばり付く、足の長い蚊のような虫が目に飛び込んできた。私は大いに驚いた。
その虫は、沈みもせず飛び立つ様子もなく、ただそこに佇んでいる。
しかも、佇んでいる足先にわずかに水面が凹んでいる。
水面に完全に身を預けると楽だろうに、その虫は決して体全体を水面に密着させず、
かといって水面に付着する部分を有しながら、
虫は明らかにそうすることで水と虫自身の二つの境界線をくっきりと引き、両者を際立たせている。
その虫を見付けることで、平坦な水が私には満々としたものに見えはじめ、
言葉にできないほど美しい世界が展開しだした。
実はあまりのことで、私の幻覚なのではないかと、本気で最近まで思っていて人に聞くことさえ躊躇していた。
だからその虫の名さえ、人には聞かず大人になった。

そのときに私にきざみこまれた感覚を、作品にし、身体表現でやってみたくなった。
水の上で、一体化でもなく飛んで行くでもなく、水面と体を自立させすまし顔で境界線の上に生きるあの虫の名前を、
私はミズスマシだと決めつけていた。それはアメンボだろうというつっこみはもはや私の耳にはとどかない。
逃げられない現実を抱え、そこを足場にしっかりとすえながらも、巻き込まれない醒めた自己保存に立脚した、
大きな幻覚を重ねる夢見る心で掴む世界がきっとある。それを、このミズスマシという作品で、結ばせたいのだ。

金満里

ミズスマシ
Water strider

インタビュー
～音楽・ウォン・ウィンツァン～

スタッフ　劇団態変の身体表現は抽象過ぎて難解、という印象が強いと思うのですが、今回、音楽として、関わる上で難しいだろうなと思う点はありますか？

ウォン　これね、身体だけじゃなくてもさ、視覚的なものにはすべてにはその表面のムーブメントの意味、内容とはまったく違う次元のある種の意志がある。たとえば、映像でいうならば、よく僕がひきだすのは、『2001年宇宙の旅』ってのがあるじゃん、あれで宇宙船が飛んでるときにウインナーワルツが流れるんだよ、宇宙的な世界に、宇宙の音楽をつけたってなんの意味もないんだよ、そこで宇宙船はワルツを踊ってるわけじゃないんだけど、そこにある種のワルツ的な意味を見つけるっていうのは、現象に対して、ななめ45度くらいの角度でぶつかっていくようなところがある。

金　そういう感じはわかる。むしろそういう、ぜんぜん違う別次元での、ものへのアプローチのしかた。

ウォン　ダンサーっていう人間の有機体が出してくひとつの、彼ら自身すらも見落としている、もしくは意識化されてない内的ななにか、そういうメタファーだよね。

金　だから、表層をはがしていくことでしか成り立たないわけでしょ。

ウォン　だからその表層をはがしていくための視覚、あるいは聴覚が、もし僕がもてるものであるならば、そこにダンサーと音との熾烈な火花がみえてくる。

スタッフ　そういうメタファーを感じるときは、どういう気持ちですか？

ウォン　そのときは、あらゆる言語的なものをやめる。言語的に解釈したり、なんらかの概念のなかにとじこめてものをみるのを止めたときに、なにかがみえてくるんだと思う。だから僕は超越って言葉を使うんだけど、超越って言葉が正しいかどうかは実はあんまり僕は考えてないし、あんまり考える人間ではないのでわかんないんだけど、少なくとも顕在意識ではない。

スタッフ　言葉で説明できること、ではなく、感覚的な事という事ですか？

ウォン　うん、だからその感覚を、いかにある種の皮膚感覚として持てるかってことで、だからそこに洋服着てたらダメなんだよ（笑）。皮膚感覚として、感じられるかどうか。それを僕が自分の中で音の、どういうことが起こってるかよくわかんないんだけど、音というもうひとつの動き、耳で感じるまた別個のもうひとつの動き、を僕が抽出できるかどうか、表現できるかもしくは具現できるかどうかということだと思うんだけど、これも言語的な作業ではぜんぜんないので

スタッフ　今回すごい楽しみな部分が、身体、美術、音楽の三つ巴。

ウォン　僕が今回おもしろいと思うのは、踊りは、舞踏系の人はどうなのか知らないけど、たとえばテープ作品やCDを流して踊る、つまり固定した音楽に踊りをつけていくっていうのはしていくんだけど、今回は生の演奏っていうことで、相互刺激しあって三つ巴っていう世界を実現できるのではないか、というのを楽しみにしてる。まさしくライブ性。今回公演は5回あるんだけど、たぶん1回たりとも同じ音を出すことはないと思うね。だからごめんなさいと、先言っておこうと思って。すいません昨日の予定は　違っちゃいました、と。その場で出てくる本質的なエッセンスというのは固定できないものなので、今日はこのエッセンスでました。そのエッセンスは明日もだしましょうっていうのは約束できないんだよね。

スタッフ　この場限りの、一期一会の。

ウォン　だからほんと、5回とも来たほうがいい

スタッフ　DVDじゃ味わえないですもんね生音は。

ウォン　そうだね、その場でしか味わえないから。今はね、インターネットとかアーカイブとかいろんな形で自由に音楽なり映像を楽しめるんだけど、今もっともパフォーム、パフォーミング、パフォーマンスってものを通してしか得られない味わえない、つかめない、もしくは、出会えない何かを、やはりオーディエンスが内的に求めてるものって、そこだと思う。人間が求めてるものってのは、潜在的になにか、深いものを希求している常に。人間は。それはやはり、ひとことでいえば原初的な叫びなんだよね。まさしくそこに踊りと音楽と舞台から叫びが聞こえてきたら、僕はもう死んでもいいかな。

ウォン・ウィンツァン
ピアニスト、即興演奏家、作曲家

1949年神戸で 香港出身の父、日本と中国のハーフの母との間に生まれ、1歳より東京で育つ。英国籍。19歳よりプロとしてジャズ、前衛音楽、フュージョンなどを演奏。
87年、瞑想の体験を通して自己の音楽の在り方を確信し、90年よりピアノソロ活動を開始。
92年、サトワミュージックを発足、1'stアルバム「フレグランス」がロングセラーになる。現在まで「Doh Yoh」「エイシアンドール」「たましいのトポス」「光の華」など23タイトルのCDをリリース。
NHK「家族の肖像」、BShi「九寨溝」、現在放送中のNHK「にっぽん紀行」やEテレ「こころの時代」のテーマ曲でも知られる。
地雷犠牲者救援CD「もしも地雷がなかったなら」、ジャズトリオWIM、クラシックアルバム「ドビュッシー」「エリック・サティ」など活動は多岐に渡る。

ミズスマシ
Water strider

インタビュー ～美術・榎忠～

金　榎さんは、夜中にずっと作品作ってたら、鉄にとり憑かれるって言うてはって、それで思わず指を、…どんどん縮めて…。

榎　そうそう。それはひとつの幻覚みたいになる。

金　幻覚が出てきて、今、手も…。

榎　うん、これは、まぁちょっとちょん切れてもうたんやけど。やっぱり、あの音とかな。回転する機械を使うからな。鉄にやられるんちゃうの。その機械の回転とか、振動とかで、なんかだんだん、おかされていく。その辺はまぁ、不思議な…。

金　不思議な世界。

金　あの埋まってるボルトというか、実際のネジ関係を、全部研いて作ってはるんでしょ。

榎　そうそう。もうみんな錆びてほかされてるやつを、もう一度僕が、一皮めくるいうんか。削ったり、手で磨いたりとか。7年間ずっとやっとった。毎晩。

金　7年間も。

榎　だいたい最終的には、この間、兵庫県立美術館でやった12トン以上くらいの感じになる。まぁ、僕は会社勤めしながらやっとったから、会社終わってから、会社の機械使わせてもらって。会社は一応5時か6時で終わったら、12時近くまでやって。それで土日もやるとか。自分で時間を作っていくしかないし。だから余計に今は定年退職して、時間がありすぎて、何していいんか分からへん（笑）

スタッフ　今回の美術を担当する意気込みは。

榎　これからやな。これから。今のところは金さんのことを分かってないことも多いし、だけど何となく、ものすごくやろうとする気持ちはすごく分かるし。金さんのイメージに近いところもあるような気がするし。その辺で。だけど舞台というのは初めてやからね。ちょっと不安いうんか、僕がどこまで言えるのかとか、そういうところもあるし。それはまたこれから吉田さん（注・舞台監督）の方に色々聞いて、ここまでやって大丈夫かとか。そういうなんは、また教えてもらおうかなと。

スタッフ　台本読んだご感想などあれば。

榎　俺が一番好きな世界やないか。僕はね、昔、絵を描いてたの。

その頃、そういう第3次世界大戦いうんか、そういう感じでいつか・・・日本では広島でやられたりとか、この間の東日本大震災と原発のこともあったけど。もっと前に、20代ころに、第3次世界大戦あったら、今度はもう原発どころか、ものすごい核戦争になる。その後の世界をね、僕は、絵で描きよった。それはマングローブではないけれど、そういう自然が犯されてしまって、奇形の花とか植物が育って、恐ろしい世界になるいうんか。

「生成」1968年頃

そういう中で生き残った人間が、生活するのはどうしたらええんか。ものすごい長い時間をかけて自給自足の世界を見つけるわけ。そういう中で、自分が果物とか、田んぼに植えたりとかはするんだけど、外へ出られへんわけ、家の外は。すごい放射能で。だから自分の家の中で、生き物とか動物とか、自分で作っていくわけ。そういう生活いうんかね。なんかそういう絵描いとった。だから、今回の金さんの作品なんかは、分かるような気もする。

金　そういう世界をね、何十年後に舞台でやるって、おかしいですよね。なんかへんな巡り合わせ。

榎　いやそれはね、金さんいう人はすごい頑固そうで（笑）、ものすごく、叫んでる人やなぁって。

金　（笑）

榎　僕はね、叫ぶのは、直接叫ばないの。作品ではね。違ったおもしろさに変えてね、やっていくというか。うん。金さんやっぱりすごいわ。だからその辺で、こわごわ参加させてもらおうかなと。僕もちょっと変わるかなぁと思って（笑）

榎忠（えのき・ちゅう）
美術家

1944　香川県善通寺市に生まれる。
2006　個展「その男、榎忠」（KPOキリンプラザ、大阪）
2007　二人展「ギュウとチュウ　篠原有司男と榎忠」（豊田市美術館）
2008　個展「この男、危険。榎忠展」（札幌宮の森美術館）
2009　神戸ビエンナーレ2009（神戸港ドルフィン、兵庫県立美術館ギャラリー棟）
2011　個展「榎忠展　美術館を野性化する」（兵庫県立美術館、神戸）
2012個展「誰がために大砲は鳴る」（CAPSULE／SUNDAY、東京）

専業美術家ではなく一般の金属加工会社で旋盤工の会社員をしながら週末を利用して制作に集中する生活を過ごし、定年まで勤め上げた。作品のために「半刈り」だった時期もそのままの状態で勤務していたという。村上隆など多くの現代美術家に強い影響を与えている。2008年に第32回井植文化賞、2009年には神戸市文化賞を受賞した。

ミズスマシ
Water strider

演出家に聞け！
五人の役者の突撃取材！

下村の突撃取材。

下村　『ミズスマシ』の世界は、僕の印象では『虎視眈眈』の後の世界なのですが、一見、そこは過去なのか、未来なのか分からないし、そこで動いているものが、人類なのかなんなのかも分からない。なんだかすごくややこしい世界ですね。

金　そうやね。設定としてはしっかりとあるんやけど、立ち現われてくるものはややこしい世界かもしれん。しかも、それを身体だけでお客さんに伝えるとなると、かなりの練り込みが必要やね。

下村　例えば、今回は死体の身体をやるわけですが…

金　（間髪いれず）下村さ、あのシーン全然練り込みが足らんねん！

下村　（動揺を隠しきれず）は、はい…！もっとその…身体に入りこむというか…

金　死体やで。腐ってんねん。死臭を漂わせている自分の身体をイメージしてる？

下村　…う、うーん。

金　さらさら思ってないでしょ（笑）。生きた身体で死んだ身体をやるっていう矛盾をもっと引き受けなあかんわ。私はね、「死」っていう言葉を見ただけで、死臭を感じるのよ。まるで今そこに漂ってるみたいに、本当に匂いがしてくるねん。人間は実際ないはずの匂いであっても、ありありと感じることができる。私たちが生きた身体で死臭を放つ、というのも絵空事ではないんよ。必ず出来るはず。ところで、下村は今回、主役として下村雅哉ここにありっていう演技を見せなあかんわけやけど、主役としての役作りはどうなん？

下村　不安はあります。役も、彷徨って自分の居場所を探していく存在というのが…

金　（再び間髪いれず）そんな生易しいものではないよ！

下村　（再び動揺を隠しきれず）あ、は、はい…！えと、這いあがってくる存在というか　…

金　這いあがるというのも違うねんなぁ。下村の役は、命をつないでいくというので精一杯の存在やな。生き継ぐっていう本能だけで生きてきた者やで。意志というのも持っているかどうかは分からん。身体からは獣の匂いがする。心は阿修羅かもしれん。

下村　なるほど。人間なのか、昆虫なのか、分からない何者かというのは、そういうところから来るんですね。

金　下村の良さは、下村が意図せずとも身体の良さが出るところや。動きも前にいったり、後ろにいったりで予測不可能。今回の作品は下村の演技に掛かっているといっても過言ではない。インタビューで私にやり込まれているようではあかんよ(笑)。しっかり練り込むように！

楠本の突撃取材。

楠本　まず、私の演じる役についてですが、今回の役では、作為的でなく無感情で、無意識の身体性が求められてると思っています。

金　そうやね。

楠本　そうなんですが、この身体性というのはどうも難しくて。すぐに雑念が入り込んで作為的な動きになってしまう。この身体性について、金さんと話して、もう少し深めていかないとなぁ、と思ってました。

金　楠本のその役、私は初めから役者を楠本で考えてたよ。今回の作品の水先案内人みたいでしょ。作品がどう進んでいくのかまだわからないシーンで、巨体でどすんどすんと歩いていく。『虎視眈眈』でやってた役とはだいぶ違うでしょ？

楠本　『虎視眈眈』では女をやったんですが、確かにその役とは全然雰囲気が違います。

金　今回は、楠本の別な良さを引き出したいのよ。クールさというか。楠本ってさ、もともと健常者で、ワルをしてたんやんな？それで、急に障害者になって荒れてたんでしょ？

楠本　若いころに体制に対する反発からバンドを始めて、ワルはしてましたね（笑）。ぶっ潰せ、みたいな気持ができていました。その頃に、事故で障害者になったんですが、本当に死んでやろうかと思いました。

金　そう！そんな感じするのよ。楠本って、いざとなったら、すごく投げやりで攻撃的な所があるんちゃうかと。今回の役で身体に表したいのは、楠本のそういう側面やね。

楠本　今回の作品は「文明」という言葉も鍵になってくるように思います。そうしたところで、作品中に登場する「紐」の道具が重要に感じられるのですが。

金　鷲田さん（注・臨床哲学者　鷲田清一氏）にアフタートークで聞いたんやけど、服っていうのは、紐を身体に結ぶところから始まったらしい。紐を結んで自分の身体を目立たせて、他人と自分を区別する。

楠本　ほう！そんな話があるんですね。

金　だから、服というのは、もともと他者と自分を分けるものとして生まれてきたと言えるかもしれんな。自分を出したいという気持ちと、恥ずかしいという気持ちの瀬戸際で、服という文明も生まれてきたんやと思う。

楠本　なるほど。そのように紐を捉えると紐を使った演技も奥深いものになってきそうです。

下村雅哉
1968年1月生まれ。
2008年の「姿現す者」より参加

楠本哲郎
1957年5月生まれ。
2008年から参加。

上月陽平
1977年5月生まれ。
1999年から参加。

ミズスマシ
Water strider

演出家に聞け！
五人の役者の突撃取材！

上月の突撃取材。

上月　今回の作品に登場する二つの踊りについて聞きたいんですけど、まずは、今世界で流行しているあれ。なんで、あれがいきなり登場するんですか？

金　あれのことね（笑）。太った男がダンスとはほど遠いダンスをしているそういうのが世界で受けたのよ。日本ではまだブームが遅いみたいやけど。意味のないダンス、受け容れられてないダンス、というところがいいのよ。既成のダンス概念を打ち壊してるから。『ミズスマシ』の中で、いきなりあの某ダンスでおバカをする、意味はない。おバカでええねん、みたいな開き直り方が態変の役者にもようやく出来るようになってきたからね。

上月　でも、態変のダンスが、なんで健常者のダンスをモデルにするんですか？そこが聴きたくって。

金　ははは（笑）。でも、某ダンス、ダンスと言えるような大したことしてへんやろ？「おどっちゃってんだよ、僕」っていうスタンスがダンスの部分に注視させるねん。どこがダンスやねん、と思ってよく見ると足を動かしてたりね（笑）。そこが障害者的やねん。だから取り入れてる。

上月　僕ね、あの某ダンスの中で、ブレイクダンス踊ってるんです。ＣＰ（注・脳性まひ）が踊るブレイクダンスって、どんなブレイクダンスよりぶっ壊れてるんちゃうかなと思ってます。

金　ダンスは健常者が作っていくもんや、というのは思い込みで、ＣＰのブレイクダンスとか、ポリオのブレイクダンスがあってもいいよね。

上月　もうひとつの踊りについてですが、「お祓いの踊り」。この踊りは結構、役者が自由に作り込んでいますね。

金　「お祓い」というのは、「あなた本当に素敵なのよ」と言いながら送りだすってことやねん。だから、もうお祝いでとにかく踊ることや。ホピ族っていうインディアンの部族があってね、私はその部族のところへ行って来たことがあるんやけど、彼らは鳥の衣装みたいなのを着て夜通しお祓いの踊りを踊るのよ。それで踊りが終わったら、ある場所にはいかないように言われるねん。で、私、踊りの後、こっそり行ってみたんやけど、そこにはさっきまで着てた鳥の衣装がすててあった。彼らは精霊を讃えて、衣装に宿らせて送り出す。『ミズスマシ』の「お祓いの踊り」もそんな感じで考えてる。

向井の突撃取材。

金　望、今回大事なシーンやってるやろ？自力で床に座るっていうのをやってるシーンのことやけど。

向井（大きく首を縦に振る）

金　あそこのシーンどう？自分でやってて、どんな感じ？面白い？自分で起きている気分になる？

向井（小刻みに首を縦に振る）

金　うん、なるよね。稽古では、ずずずってこけることもあるやんか、でもたっているとどんな気分？

向井（腕を外側へ振りつつ）わーっ。

金　望が山登りしたらあんな気分かなって。山登りして下界を見ると気持ちがスーとするねん。気持ちいいやろ？

向井　おー。

金　山頂に辿りつくと、広い景色が広がるねん。それと同じや。向井はその山頂に立って、お客さんにどんなことを言いたい？

向井　はっは。

金　よう来たな！ってか？

向井　ふふふ（笑）。

金　そうか、高いところにいる自分を自慢してやれ！

菊地の突撃取材。

菊地　今回は、群舞が多いんです。奥に居る役者があんまり見えないようなシーンもありますが、私はそこでも、脇役の良さというものを感じています。脇役の見せ方っていうのを金さんはどう考えてますか？

金　お客さんに見えない裏側であっても、世界を作っているのが舞台上では自然なこと。裏側の世界には裏の在り方があって、表の在り方と混同してはいけないとは思うけどね。でも、菊地は頑張ってしまう人やね。演技をしようと思うと張ってやってしまってる。よく見られたい、という思いが出て来てるやん。それは結婚して、良い奥さんやろうとするのも影響してるんかもしれんけど。一般の価値観に迎合しない見せ方というのをもっと探っていかんと。

菊地　役になりきっている時はいいんだけど、どうしたらいいか分からなくなっている時にそれが出て来てるかもしれないです。

金　そういえば、住田さん（注・菊地のつれあい）は、トーキングエイド使ってるやんか。私あれなしで話せばいいのにー、と思ってるんやけど。

菊地　私は生の声で住田さんと話しますよ。住田さんの声が好きで、ほめてたら段々増えてきて（笑）。

金　マレーシアに行った時、現地のＣＰの人、みんな話さないのよ。皆で話しましょうと言うと、楽しんで話し出すねん。自分の声で、表現やるっていうの本当はやりたいんや。日本なんか、話す土壌があるんやから、トーキングエイドとか使わんとどんどん話したらええねん。菊地は態変でもＣＰの下村とか上月の言葉を引き出す役割っていうのできるんちゃうかな。

菊地　そうですね。役者同士の練り込みも重要になるし。

金　『ミズスマシ』を菊地はどんな人に観てもらいたい？

菊地　障害者の人とか、一般的な価値観に苦しんでいる人。態変の作品を観れば、その人視点とか考え方が変わるんじゃないかなと思う。それから政治の人、人類が滅亡してその次の世界を提示したい。

金　なるほど。確かに私の作品というのは文明批判にならざるを得ない。それが前提になるんだけれども。それを観たからって、どうなるかは分からないんよ。だから何かの思想とかを訴えるために作品を作るわけじゃないねん。私たちは作品によって新しいものをただ切り開く。新しい何かは、それを観た人が何かを感じて作っていくんじゃないかと思ってる。だから、本当に『ミズスマシ』は広く人に観てもらいたいね。

向井のぞみ
1993年10月生まれ
2000年
「壺中一萬年祭」
より参加

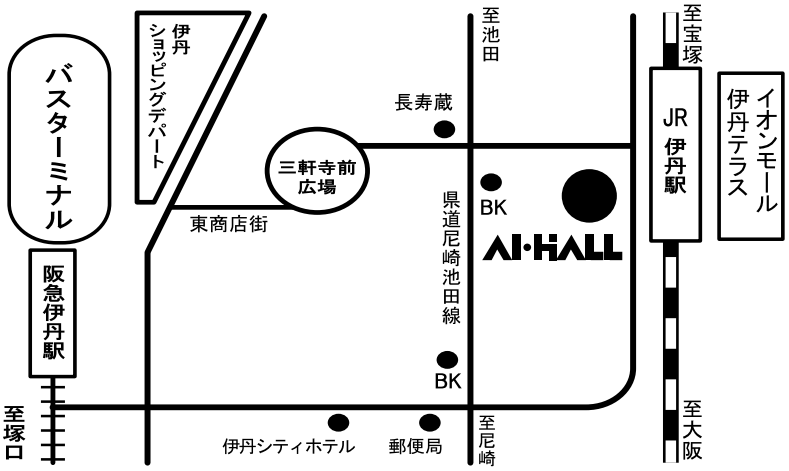
菊地理恵
1974年10月生まれ
2000年
「壺中一萬年祭」
より参加

ミズスマシ
Water strider

劇団態変第５８回公演『ミズスマシ』詳細

［日時］２０１３年２月１４日（木）１９：３０開演
１５日（金）１９：３０開演
１６日（土）１４：００／１９：３０開演
１７日（日）１４：００開演
(会場にて 1 時間前より整理券を配布。開場は公演の 30 分前となります。)

［会場］アイホール
(兵庫県伊丹市伊丹 2-4-1)
◇ JR 伊丹駅下車徒歩３分
◇阪急伊丹駅より東へ徒歩７分



[チケット料金]
全席自由・日時指定

前売 (一般) ￥3,500
(シルバー) ￥3,000
（学生）￥2,500
(障害者＋介護者ペア) ￥6,000
当日￥4,000

※公演当日、受付順に整理番号をお渡しします。開場時はその番号順にご入場下さい。
※学生は大学生以下、シルバーは 65 歳以上とさせていただきます。受付にて年齢の証明できる物をご提示ください。
※車イスでのご観覧は、会場の都合上、各回 5 席に限らせて頂きます。必ずお早めにご予約ください。
※受付にて劇団態変賛助会員証提示の方に限り、チケット料金から 500 円払い戻しさせていただきます。
【ご予約】
tel: ０６－６３２０－０３４４
e-mail:taihen.japan@gmail.com
劇団態変ホームページからの予約が便利です。
「劇団態変」で検索し、日本語トップページ→公演案内　と辿ってください。

今後のイベント

２０１３年３月３０（土)、３１日（日）さなぎダンス企画＃３　at メタモルホール

関西のコンテンポラリーダンスシーンで成長途上の若手を「さなぎ」になぞらえ、その多彩な表現を上念省三氏による解説付きで紹介する企画。ダンスを観ることを食わず嫌いしている方にこそお勧めです。今回は態変の菊地理恵が登場します。

２０１４年３月　劇団態変３０周年記念公演『Over the rainbow』 at ABC ホール

劇団態変の公演映像、販売中です。ぜひお買い求め下さい！
●態変韓国公演『ファン・ウンド潜伏記　- 朴璟琅同行の新たな旅路 -』定価３０００円
●金滿里ソロ　『天にもぐり地にのぼる』メタモルホール公演 定価３０００円
●『一世一代福森慶之介　又、何処かで』定価３０００円
※劇団態変２０１２年公演『虎視眈眈』映像も現在作成中。ご予約を受け付けております！

1991年9月 第三種郵便承認　毎月（1・2・3・4・5・6・7・8の日）発行

劇団態変活動継続へご協力のお願い

① 2013 年度賛助会員になって下さい！

私たちの呼びかけに呼応し、賛助会員となって下さった皆様、ありがとうございます。自主運営が始まって 10 ヶ月、皆様のご支援のおかげで 4 回の本公演をおこない、アトリエでのイベント等クリエイティブに活動を行なう事が出来ています。来年度も私たちは、劇団態変の多様な芸術表現が人間の生を豊かにするものとなることを確信し、今後も芸術創造を継続していきます。何卒、2013 年度も賛助会員のご更新、新規のご応募ならびにこの制度の普及へご協力をお願いいたします。

【賛助会員制度について】

[会員の種類]　個人会員　年会費一口 5000 円／法人会員一口 20000 円

[会員特典]

・会員証発行　毎年絵柄の変わる会員証を発行します。
・劇団態変の公演を賛助会員価格でご覧いただけます。個人会員様はチケット料金から 500 円引き。
・法人会員様はご招待券を一口につき 1 枚進呈させていただきます。
・当該年の態変公演のダイジェスト映像収録 DVD を年一回進呈を企画中。

●ご入金方法

・郵便振込
この DM に同封の郵便振替用紙にご芳名と送付先ご住所を記載していただき、お振込をお願いします。
差し支えなければお電話番号、メールアドレスもお教え下さい。

・PayPal にて御入金
メールアドレスとクレジットカードをお持ちの方は PayPal での御入金も可能です。
劇団態変 HP →「劇団態変」で検索していただき、日本語トップページから「賛助会員募集」へと辿って下さい。

---

②情報誌イマージュ購読者拡大にご協力を！

異文化の交差点に生じる濃度の高い、とことん突き抜けて面白い発信を目指して年 3 回発行を続け 19 年目。購読者数低迷で発刊続行の危機ですが、逆にあと 100 名、購読者が増えれば、態変の活動資金も捻出できます。

◆バックナンバーの販売致しております

バラ売りは１冊５００円、在庫に限り３冊セットで１０００円でご購入いただけます。

◆まだご購読いただいていない方は、この機会に是非ご購読を！

1 冊 500 円。是非とも年間購読（年３回、1500 円）お申込みをお願いします。

◎お申込み方法

◇この DM に同封の郵便振替用紙にご芳名、送付先ご住所、○号から～年間購読、もしくは単品○号購入と記載していただき、お振込をお願いします。
◇態変ホームページ上に予約フォームがございます。
「劇団態変」で検索し、日本語トップページ→出版物案内と辿って下さい。
◇ PayPal にてクレジットカードから御入金いただくことも可能です。

最新刊　vol.55　2012 年冬号の内容紹介

クロスオーバー談義●高橋源一郎×金満里　「恋する原発」×「虎視眈眈」いま表現に求められること
脱原発「はじまりの夏」を振り返る　/ 大熊ワタル（ミュージシャン）
［さなぎダンス企画 #2］反復することが呼び起こすもの　/ 上念省三
［福森慶之助の詩］最後に登場して来た私たち　/ 福森慶之助
= 新連載 =
わかぎゑふの得か毒か ?!　❶本音が聞きたい！　/ わかぎゑふ

次号（Vol.56 2013 年春刊行予定）には、イッセー尾形氏の一人芝居を演出されてきた森田雄三氏との対談を掲載予定！！

発行人：関西定期刊行物協会／大阪市天王寺区真田町２－２　東興ビル４F
編集人（返送先）：イマージュ　金里馬　池田光耀　安道幹　和田佳子　仙城真　小泉ゆうすけ　川口葉子
〒 533-0031 大阪市東淀川区西淡路 1-15-15
tel/fax 06-6320-0344 e-mail taihen.japan@gmail.com　定価５０円